

教師の生徒への密かな期待

田 畑 治

一

教師が一人ひとりの生徒に対して、どのような生徒に成長してほしいと願うかは、教育目標、保護者の期待・要望、そして生徒本人の興味・関心、性格傾向、日常生活態度、学習成績などによって左右される。そして、学校教育場面で出くわす生徒一人ひとりとは、毎日、そして瞬間々々によって、異なる様相を示している。つまり生徒一人ひとりの心身のあり様や状況によって、刻々と変化しているものである。

このように変化しつつあることを、こちらの側は、十把一からげにして、粗っぽく生徒を「ああいう子だ」と先入観をもってしまったり、固定観念をもってしまったりするものである。教師も生身の人間であるから、ある面では止むを得ない。しかし、そのまま見逃して、いなしてしまっただけではもったいない。生徒には申しわけないが、それよりもっと相対するこちらの側では、大きな機会を逸することになるし、更に言えば飛躍や転換を計る絶好のきっかけになるからである。こちらの側では、生き生きしているはずの生徒の姿を、一方的に決めつけ、こちらの側で勝手に「あの生徒は、こういう生徒である」と固定観念をもってしまうことである。これでは、生徒が可哀想であるし、申しわけないことをしていることになる。こちらの側の“誤解”(misunderstanding)は、ここから生じる。相手(生徒個人、生徒集団)とこちら(教師)の関係は、ここからズレてしまうことになる。

二

人間の心理的援助を旨とするカウンセリングや心理療法では、悩みや苦しみをもちて目の前に来談する個人(ときには集団)が“誤解”していることを傾聴していくことから始まる。この“誤解”の内分けは、多様である。まず「自分は無能な人間である」とか「駄目な人間である」とか、それこそ勝手に相手の側で決めつけてしまっていることがある。その際、家庭では両親か兄弟・姉妹の誰かによって受けとめられず、拒否されて、「お前は駄目な子どもである」と決めつけられている場合がある。本人の側でも、「自分は無能な人間である」「自分は駄目な人間である」という想

いを次第に形成してしまっている。そして本人は劣等感に打ちひしがれている。これが“誤解”の出発点である。

もう一方、思春期・青年期、中学・高校期にありがちな“誤解”は、自意識過剰やうぬぼれの心性であり、思い上がりの心性である。自分は、まだ児童期の心理を引きずりながら、他方ではいっばしのおとなを夢みて、えらそうぶってしまうという心理を示し、実際に逸脱した行為や行動を示してしまう。このような生徒は、どこか背伸びをし心の底でさびしい思い、孤独な思いを、どこか感じているかもしれない。そして人知れず、悩み、苦しんでいるものである。

更に、この時期に好発する心理に、ありもしない妄想やうわさに襲われることである。たとえば、クラスの子が自分をかどわかしている、いじめている、のけ者にしているという感情をいだいてしまうことである。実際はそうではないのに、目つきやことばつき、ときには喧嘩がそうだ、といった調子で自分が追い込まれてしまうことである。これらは妄想、錯覚、幻聴といった“誤解”であり、精神病理である場合がままある。

いま述べてきた3通りの状態の“誤解”は思春期・青年期、中学・高校期にそのまま直面するのではなかろうか。

三

それでは、教師、指導者は、これらに対して、どのように対処していけばよいのであろうか。教師がこのような状態に陥っている生徒に密かに期待することは、そのような状態——自分は無能である、自分は駄目な人間である；自分は世の中で一番優れている、自分が思うように世間は動いていく；自分を誰かが陥し入れようとしている、自分をいじめている、自分をのけ者にしようとしているなど——から、自由である状態、伸び伸びとできる状態に解放していくことであろう。そして更に、積極的に中学・高校期を期待されて生き抜いていくことであろう。このような状態に生きることができる生徒は、希望に生きていくであろう。また仲間・級友に支えられて期待されているゆえに、

他人への思いやりや暖かな態度が示されるであろう。そして人間への信頼をこの上にも持つことができるので、人間関係での協同や協調ができるであろう。また学校生活においても、責任が自覚でき、ルールも重んじていくことが可能になってくるであろう。そしてさらにまた、このような状態の生徒は、心が健康であり、自己開放、開放的な態度をもっており、ユーモア感にも満ちているし、創造性も豊かに芽生えるであろう。

四

“誤解”から“理解”への転換を促進する教師、指導者の役割は、計り知れず大きいといえるのではないであろうか。

結論を先に述べれば、生徒は一人ひとり、かけがえない生命をもち、生徒一人ひとり自ら呼吸し、何かを感じているという厳然とした事実を正確にこちら側で見据えていくという努力を絶えず行うということである。そして、生徒一人ひとりを決して見限らず、見守るという態度を、たとえこちらの側で疲れていたりしていようと、一貫して持ち続ける努力をするということである。

生徒を上から指し、導くという心構えも必要である。しかし、生徒を下から見つめる、生徒の下側に立つ（understand）ことも、もう一つの視点としてもち合わせることである。たとえていえば空から降った雨水は、屋根に落ちると、瓦を伝って、必らず樋の方に流れていく。こちらは、それを受け止める心持ちで構えていくのである。こちらがこのような姿勢や心構えをしているとき、生徒は“誤解”していることを訴え、伝えてくれものである。こちらの態度としては、あるがままに聴きとり、こちらで受けとっていきつつあることを、返えしてみる。そのような試みは、たいてい50%くらいしか受けとめられていないものである。つまり、たいていこちらの側で、“条件つき”で聴き、受

けとっているからである。断定的に聴いていっては、決して雨水は下に降りてこないであろう。

五

ここで聴くということについて、さらに述べてみよう。聴くということは、決して簡単なことではない。“心ここにあらざれば、視れとも見えず、聴けども聞こえず”という論語の大学編に一節がある。

聴くというのは、意を以って聴くのである。いい加減で、生半可な気持では聴けないのである。中学生であるからこそ、高校生であるからこそ、そのような無能感、自意識過剰感、あるいは妄想・錯覚・幻覚に陥っていることがあるという認識をし、真面目に「傾聴」していかななくてはならないのである。決して聴いてやるという態度でなく、むしろ聴かせていただくという“下に立つ”態度、理解的態度が必要なのである。

ちなみに「聴く」は耳遍に十四の心（感覚）から成り立っている。これら十四の心（感覚）には、どのようなものがあるのであろうか。これらは、生徒から、彼らが自ら呼吸し、感じたり、想っていることを学びとることによって、明確になるのではないであろうか。日々の教育実践を通して、明確化したいものである。

参考文献

田畑 治 1984 教育における共感と離反 『名古屋大学公開講座 2 現代のコミュニケーション—情報・適応・社会』名古屋大学出版会、37-54頁。

田畑 治 1991 カウンセリング・マインドとは何か。『児童心理』6月号臨時増刊 第45巻(第8号)、12-20頁。

田畑 治 1986 私のカウンセリング 田中正一編『カウンセリングと生涯学習』共栄出版 226-236頁。